慶應義塾大学教養研究センター基盤研究〈文理連接プロジェクト〉

研究会テーマ：　「エコロジー」をどのように論じることができるのか（1）

2022年4月29日

報告者：宮本万里

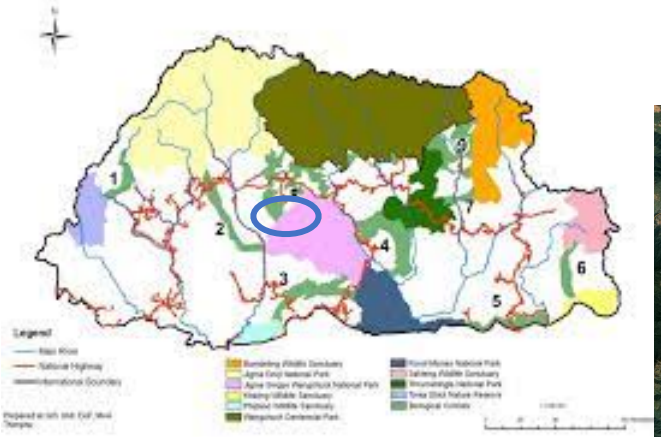
１）分析視覚：　環境人類学の視点から、環境と人の営みを考える

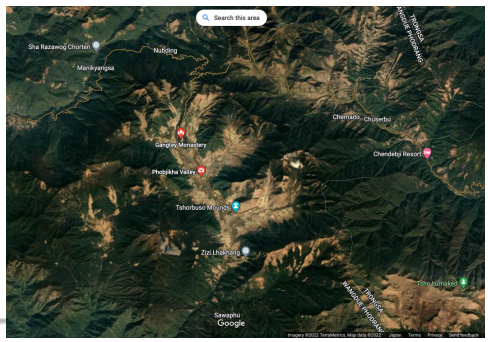
- 全体論的なアプローチをとる学問としての人類学：　人間と環境の相互作用の複雑さを探求するため、現地の個別の事例をとおして、政治的、文化的、経済的要因の相互作用を同時に理解しようと試みてきた。

- 生態学という意味でのエコロジーを考える：文化生態学、政治生態学*、歴史生態学
  *一見厳密に科学的（つまり、非政治的）であると思われる環境について、政治及び経済的側面における権力の動態に注意する姿勢も含む。
- 自然環境保護という意味でのエコロジーを考える：　環境主義、環境保護のための政策や運動（とその影響）
- 人々の生活の中のエコロジーを考える：　生態環境に応じて暮らしてきた人々（農業・牧畜・狩猟採集）にとって、環境を守る、とは何を意味するのか。生活を、信仰を、文化を守るということ？

２）対象地域：　南アジア、ブータン

環境保護を国是としてきたことで知られるブータン王国の自然保護区とその下にある村落社会を対象地域とする。具体的には、2002年以降2019年までに断続的に実施した西ブータンのポブジカ谷での聞き取り調査のデータをもとに、国家の開発政策および自然保護政策が農牧社会の生業、人と動物の関係性、生態環境そのものにもたらす影響を改めて分析する。そこから、ヒマラヤの山岳民にとっての「エコロジー」とは何か、そして彼らにとっての「よりよい生」とは何かを考えてみたい。





３）対象とする共同体と事象：

①近代化と経済開発

西ブータンのポブジカ谷の農牧民。人々は数十年前から寒冷な湿地を囲むこの土地で商品作物のジャガイモを栽培している。収穫したジャガイモは袋詰めし、借りたトラックに山積みにしてインド国境の町へ降り、高値のつく国境の市場でインド人業者に売る。売上

金が手に入ると、ブータン国内最大の市場を持つその街で米や豆、衣類、石鹸、茶、バター、絨毯、毛布、携帯電話などの必需品を購入して帰途につく。ジャガイモ栽培は、現在までにポブジカ谷の住民の多くにとって不可欠な生業となっており、2000年代初頭までには化学肥料や殺虫剤、トラクターなどを購入するため、現金はますます重要になりつつあった。他方、南の畑で行なっていた自家消費用の米の栽培は放棄され、市場で購入したインド米が消費されている。

②森林保護政策による野生動物との距離・関わりの変化

大切な農作物を野生動物から守るため、農民たちは畑の周りに高い石垣を作り、収穫期が近づくと畑の見張り小屋に寝泊まりして夜な夜な猪避けの咆哮を発し、生産物を守る。猪と村人との静かな攻防の背景には、自然環境保護を掲げる政府によって野生動物の狩猟が禁じられる一方で、自然保護区や野生生物コリドーの設立が森林伐採に対する厳しい制約をもたらしたことで森が集落のすぐ近くまで迫り、猪などの野生動物が一層村や畑に入りやすい環境が作られたことがある。（森林保護政策に付随する「人間と野生動物の衝突」という問題）

ジャガイモという最適な餌を求めて毎日のように猪が襲来し、その個体数が増加していると村人が認識するなか、森林局は所有する畑から十数メートル以内の範囲においては、猪などの野生動物を害獣として駆除することを特別に認めることとなった。農耕民にとって家畜化されたウシ、ヤク、ブタ以外の動物の肉は従来異質な存在であった。猪を食べることは、移動しながら森で暮らす牧畜民や、モンパなどの森で暮らす「原住民」の習慣であり、水田耕作の盛んな西ブータンの農耕民の間では、自らの習慣に反することと考えられていたが、現在は罠に猪がかかれば、人々もこっそりと食べるようになっている。（新しい食習慣、野生動物との新たな距離の創出）

③生業と住処、家畜との関わりの変化

調査地である広大なポブジカ谷はいくつもの異なる行政単位の境界が入り組んだ地域であり、さらにそこに暮らす人々がしばしば伝統的な季節的移住の習慣を行使してきたため、夏と冬で居住する住民の顔ぶれは変わる。谷の北側の丘に聳える仏教僧院の出家僧たちとそれに付き従う俗人僧侶とその家族は、冬が近づくとポブジカ谷を離れ、温暖な低地の村（冬の村）に所有する僧院と家へ移り住んだ。他方で、谷の深部（南側）に土地や住居を持つ者の多くは牧畜を生業としてきた人々であり、彼らは冬が近づくと山頂付近にある夏の放牧地兼定住村からヤクやヒツジを連れて山を降り、ポブジカ谷に滞在した。

しかし、近代的な統治を目指すブータン政府が、国民に定住的な生活を促すようになると、この季節的移住の習慣も徐々に放棄されていった。僧院の周辺に居住する人々は、従来の拡大家族システムを解体して世帯を二分し、夏と冬の村に分散して定住するようになった。温暖な低地での定住を決めた者たちの中には、ポブジカ谷の家屋と土地を谷の奥に住む牧畜民に貸出したり、売る者もいた。他方で、ポブジカ谷の奥の牧畜民の中でも、ヤクなどの家畜を売却し、山頂に維持していた定住村を捨て、谷での定住的な農牧生活を選択する者が増えていった。

４）考えるべきいくつかの点：

環境保護政策（＝開発政策）の中で、家畜と共に生きる生活の断絶、季節に応じた移動の停止、仏教儀礼の肥大化と動物供犠の否定が進む。山の神々への畏れの喪失（薄まり）と、自然を飼い慣らす思想の極大化が起こりつつあるのか。その先に生まれうる（動物を含む）環境と人間との新たな関係性は、どう切り結ばれるのか。